

なぎ 椰 の 野 遺 跡

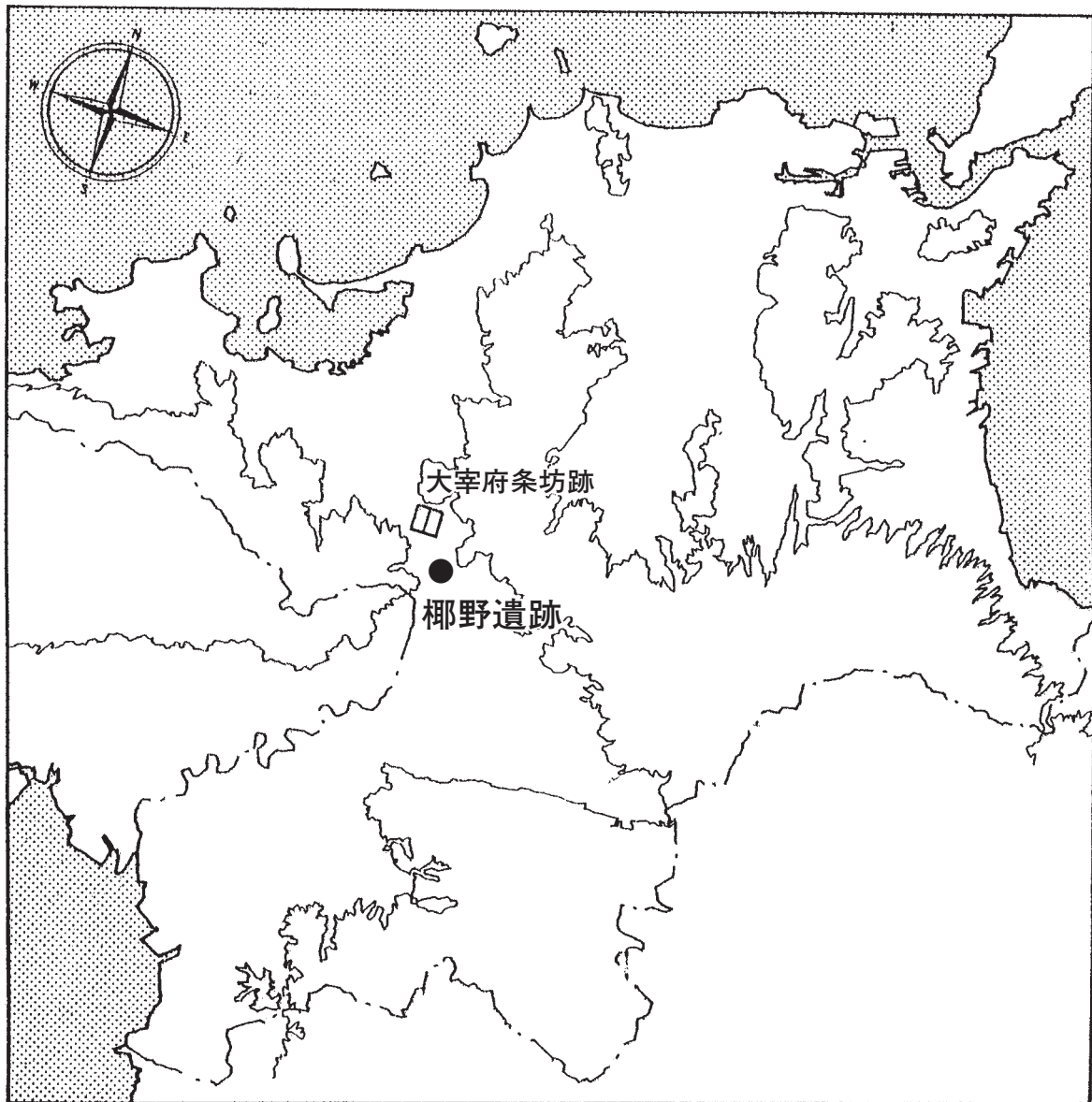
筑紫野市文化財調査報告書

第88集

2006

筑紫野市教育委員会

なぎの 椰 野 遺 跡



例 言

1. 本書は、個人住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
2. 調査は、平成13年度に筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 調査対象地は、筑紫野市大字隈220番地 6 外である。
4. 試掘調査から契約に至るまでの業務は、小鹿野亮・渡邊和子（当時文化課 文化財担当 技師）が行った。
5. 発掘調査は、小鹿野・渡邊が行った。
6. 調査に係る遺構実測は、小鹿野・渡邊が行った。
7. 遺構写真は渡邊が撮影し、遺物写真についてはフォトハウス OKA に委託し撮影した。
8. 現地での遺物取り上げにあたっては、完結する単体の遺構には頭に S を冠し、掘立柱建物跡として纏まらない単体の Pit には P を冠した。報告書作成にあたり、遺構の性格付けを行い、竪穴住居跡を SI、土坑を SK、溝状遺構を SD の略号とし、遺物取り上げの番号をそのまま付した。
9. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
10. 本書で示す土層や遺物の色については、農林水産省水産技術会・(財)日本色彩研究所監修「新版標準土色帳」を基準とした。
11. 挿図中に使用した方位は、すべて座標北を指し、磁北を示す場合は、挿図中に M.N を記している。
12. 報告書作成に係る製図は一部を渡邊が、他は(有)文化財テクノアシストに委託した。
13. 本書の執筆・編集は渡邊が行った。

目 次

本 文	頁		頁
1. 調査に至る経過	3	SK-5	9
2. 位置と環境	3	出土遺物	10
3. 調査の内容	4	SD（溝状遺構）	10
表採・試掘出土遺物	7	出土遺物	11
SI-8	7	Pit 出土遺物	11
出土遺物	9	4. おわりに	11

Fig. (挿図)

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	1	Fig. 7 SI-8 実測図 (S=1/60)	8
Fig. 2 昭和52年の周辺		Fig. 8 SI-8 出土遺物実測図 (S=1/3)	9
地形図 (S=1/2,500)	2	Fig. 9 SK-5 実測図 (S=1/60)	10
Fig. 3 平成2年の周辺		Fig. 10 SK-5 出土遺物実測図 (S=1/3)	11
地形図 (S=1/2,500)	ト レ ペ	Fig. 11 SD 出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)	12
Fig. 4 現況測量図 (S=1/300)	4	Fig. 12 Pit 出土遺物実測図 (S=1/3)	13
Fig. 5 全体遺構配置図 (S=1/200)	5		
Fig. 6 表採・試掘出土遺物			
実測図 (S=1/3・1/4)	7		

PL. (写真図版)

PL. 1 全景	6	PL. 6 SK-5 出土遺物	11
PL. 2 表採・試掘出土遺物	7	PL. 7 SD 出土遺物	12
PL. 3 SI-8	8	PL. 8 Pit 出土遺物	14
PL. 4 SI-8 出土遺物	9	PL. 9 墨書土器赤外線写真	15
PL. 5 SK-5	10		

表

表-1 出土遺物観察表	16~17
-------------	-------



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



Fig. 2 昭和52年の周辺地形図 (S=1/2,500)

1. 調査に至る経過

平成12年3月6日に分家住宅建設のための都市計画法第32条による協議が、(株)三友測量（以下三友測量）より提出された。予定地は筑紫野市隈69番地4、70番地3、320番地6で、周知の遺跡に該当する事から文化財保護法の説明ならびに事前の確認調査を指導した。指導後、3月8日付けで地権者より「埋蔵文化財の所在の有無」についての照会があり、3月9日に確認調査を実施した。確認調査の結果、密度は薄いが遺構の存在する事が確認できたために三友測量および地権者に報告し、造成計画の変更等を含んだ協議を行った。その後3月31日に文化財保護法第57条の2（現第93条）の提出があり、4月に県文化財保護課より工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知があり、直ちに三友測量と届出者に伝達した。届出者からは土地の有効利用のためには造成計画変更は不可能である旨の報告を受けたため予定地内の本調査について地権者と協議を開始した。建築工程を調整する事と予定地内の削平箇所を本調査対象とする事で協議完了し、発掘調査の覚書を締結した。調査は平成12年5月1日に着手し、5月20日に完了した。

2. 位置と環境

遺跡は筑紫野市大字隈に所在する。遺跡の所在する大字隈は筑紫野市の南部にあって、昭和57年度より開始した隈・西小田地区土地区画整理事業（以下区画整理事業）により大規模な住宅地に変貌をとげた一角に位置する。対象地周辺は区画整理事業に組み込まれていない範囲で自然の景観を留めている。区画整理事業に伴う発掘調査により大規模な遺跡群が所在する事が確認され、発掘調査の結果は、隈・西小田地区遺跡群として報告書が刊行されている。この遺跡群は、三郡山塊に源をもつ宝満川中流域西岸に面し、背振山塊より派生した複雑な谷により開析された標高20～50m前後の緩やかな低丘陵上に立地している。その宝満川中流域に面した低丘陵地には数多くの遺跡が所在する事は、すでに多くの発掘調査報告書で知られている。柳野遺跡は隈・西小田遺跡群第10地点の一部にあたる。第10地点は標高70m前後を測る原田境から北東に長く延びる丘陵で二ヶ所の鞍部を持ち、最先端の丘陵部が平野部や宝満川に面している。区画整理事業の発掘調査では、この丘陵尾根上には21基の古墳が確認されている。一ヶ所目の鞍部の先には標高50m前後のやや平坦な広い頂部があり、ここは現在近隣公園として古墳が保存されている。この公園東側に二ヶ所目の狭い鞍部があって、その先はやはり標高30～40m平坦な頂部を形成している。この頂部東側斜面が今回の調査区で、東南側には日吉神社が勧請されている。昭和52年の地形図では旧地形は二ヶ所目の鞍部はなく近隣公園の頂部から自然と延びた丘陵先端部であった可能性も考えられる。現在二ヶ所目の鞍部付近は、住宅や畑などに開墾されている。この二ヶ所目の丘陵頂部は平成元年に無届で一部開発され、地権者に文化財保護法を指導し事なきを得た経過もあったが、現状では遺跡は一応保存されている。先端丘陵西斜面部は第10地点の一部として発掘調査を実施し、弥生時代後期・古墳時代頃の住居跡が多く検出されている。このことから当該地にも同時期の集落の存在は予想できた。平成13年度に調査された若江天神社前遺跡では、12世紀後半を下限とする道路跡が検出された事や東南斜面部にある日吉神社の勧請は中世頃で、肥前竜造寺家の文献にも隈村の記載がある。また江戸時代の旧松崎街道が前面にある事を考慮すると古墳時代以降のこの周辺を知る上で重要な遺跡が存在する可能性もある。

3. 調査の内容

調査区内の基本層序は、①表土②花崗岩バイラン土③八女ロームである。調査地の標高は24～29 mを測り、北東向きの斜面で宝満川の西岸にあたる。頂部近くは急斜面になり、遺構は殆ど検出されない。また斜面中位から裾部は緩やかな平坦面をなすが、試掘調査の結果で積み土により地形改変がなされている事がわかった。この平坦面には0.3～1 mの厚みで積み土がある。また、ここは積み土中だけでなく、表土にも弥生式土器片や須恵器片など多くの遺物が含まれるが、遺構はまったく確認できない。遺構が検出される面はこの埋土直下の花崗岩バイラン土で、旧地形もわりに緩やかな斜面となる。遺構は、この緩やかな場所に集中している。今回住宅建設に伴い、この緩やかな斜面を削平するのが主な計画であり、積み土による設計を協議したが変更は不可能なため、この範囲を本調査の対象とした。検出された遺構の主なものは、SI（竪穴住居跡）1軒・SD（溝状遺構）8条・SK（土坑）1基・Pit（柱穴）125個を数える。Pitには規則性はなく、建物跡として纏まるPitは検出されなかった。出土遺物は細片が多く図示できるものは少ない。また遺構に伴う遺物も少なく、時期を明確にできなかった。

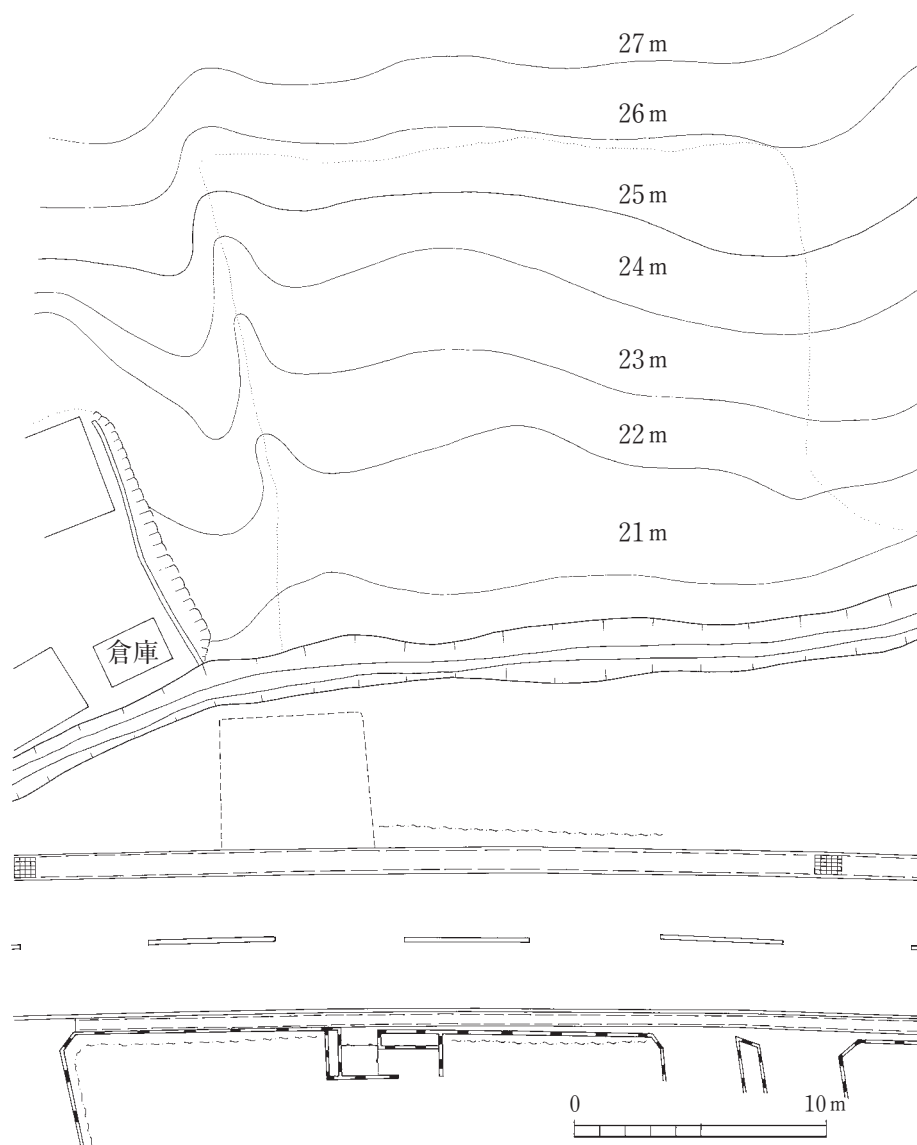


Fig. 4 現況測量図 (S=1/300)

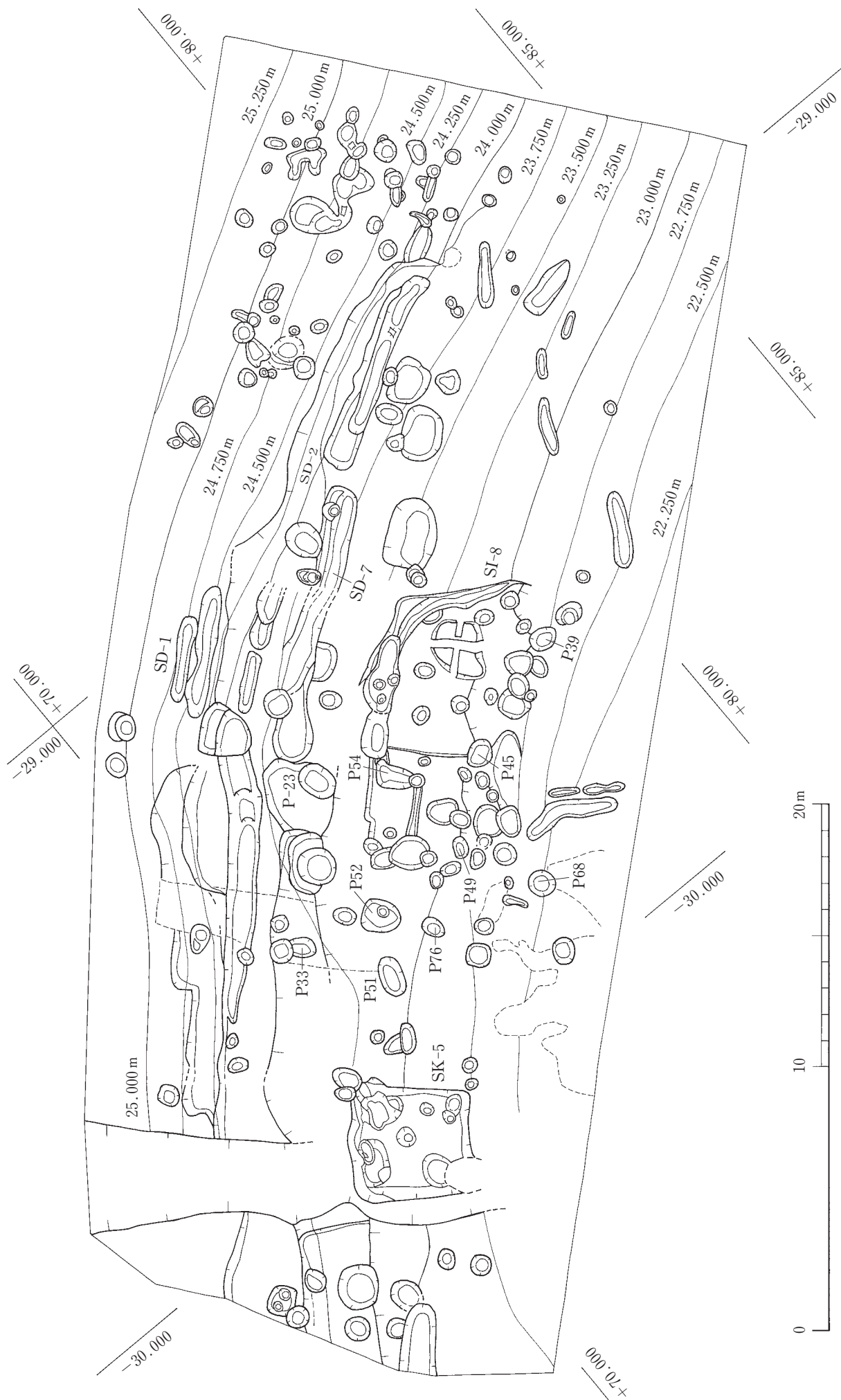


Fig. 5 全体遺構配置図 (S=1/200)



北側から



中央部

表採・試掘出土遺物 (Fig. 6) 1は高坏の坏部片。外面の色調は橙色 (5YR6/6)・明赤褐色 (5YR5/6)、内面にぶい黄橙色 (10YR6/4) を呈す。胎土はわりに精製されて僅かな砂粒とウンモが含まれ、焼成は普通。調整は内外面ともにヨコナデが施される。2は須恵器の甕の口縁部片で、外面灰色 (7.5Y5/1)、内面灰色 (5Y6/1) の色調を呈す。胎土は白色粒を含み、焼成は普通。内外面ともにヨコナデ調整される。3の須恵器甕の口縁部は器高8.0cmを測る。外面は灰色 (10Y6/1)、内面灰オリーブ色 (5Y6/2) をなす。砂粒を少量含み、焼成は悪い。外面の胴部にタタキを施している。4は高台付坏で、復元口径12.6cm、器高3.6cmを測る。底部の端近くに低い高台を貼り付ける。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好。内外面ともに灰白色 (N7/) の色調を呈す。5は弥生中期後葉の開口壺。胎土に砂粒・白色粒が多量に含まれ、焼成は普通である。復元口径28.8cm、器高25.9cmを測り、頸部と胴部境に一条の凸帯を持ち壺全体の重心は低く胴部中位にある。

SI-8 (Fig. 7) 調査区のほぼ中央で検出された。主軸をN-44°-Eにとる。平面形は不整長方形もしくは正方形を呈す。住居跡の南壁は二通り、①南東側にあるコーナー部までを壁体とする長さ4.2m②壁溝のコーナー部分までの長さ3.0mを想定できる。①の壁体は残存状況も良いが、中央部は2個のPitに切られる。壁高の深さは残りの良い所で40cm、西側ほど浅く14cm前後の深さとなる。東壁は長さ2.5mだけが検出できた。壁体はやはり蛇行し、壁は26~34cmの深さとなる。東壁側の壁溝は壁体に沿うが、北西壁溝コーナー部は、かなり内側にある。コーナー部は角張らず丸みをもって南壁側へと続いて、深さは10cm前後となる。南壁溝から東側に70cmの長さ続くが、これはPitと重複し、ここで壁溝は途切れ

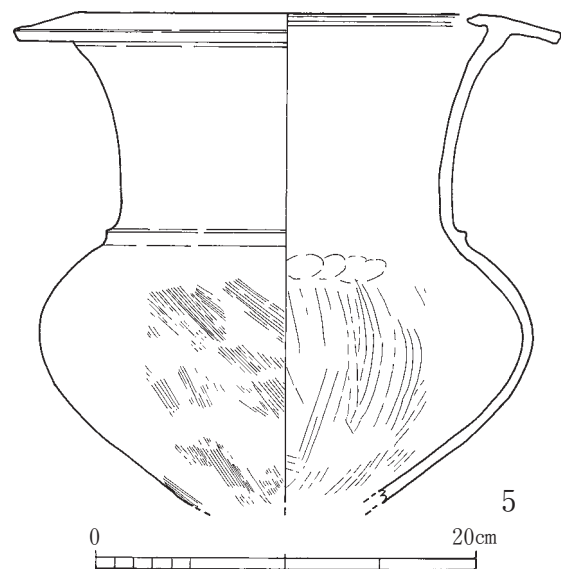
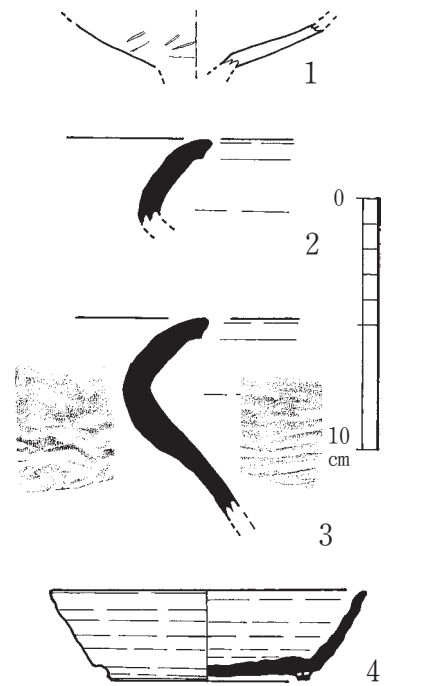


Fig. 6 表採・試掘出土遺物実測図
(S=1/3・1/4)

ている。両コーナーを比較すると同じ遺構内の壁溝とは考え難く、この住居跡の南壁は①としておきたい。東壁の北東コーナーよりにかマド痕跡が検出できた。熱還元が弱く、厚み 2 cm 前後の火床と基底部分の痕跡だけで上部の詳細は確認できない。また床面は中央よりやや南東側に 5 cm ほどの高低差があって二つに分かれる。上下の床面を精査すると下段の床面埋土は、汚れが目立ち土は締まった状況で、これを掘り込んでかマド基底部を構築しているため SI-8 の床面は上段のレベルと考えておきたい。

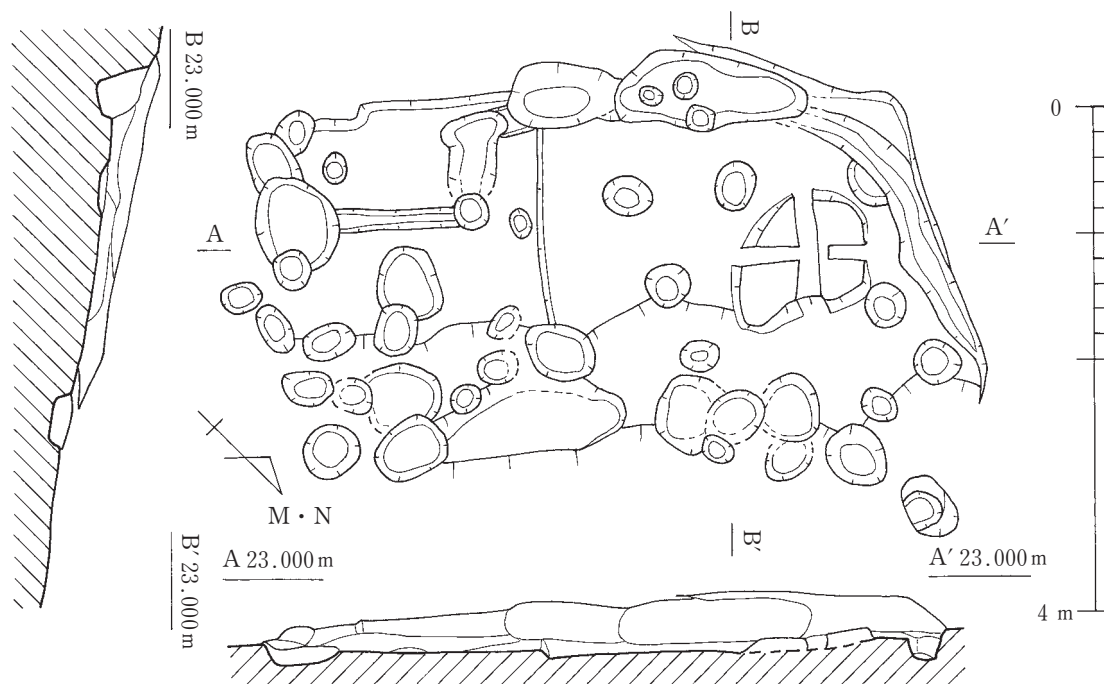


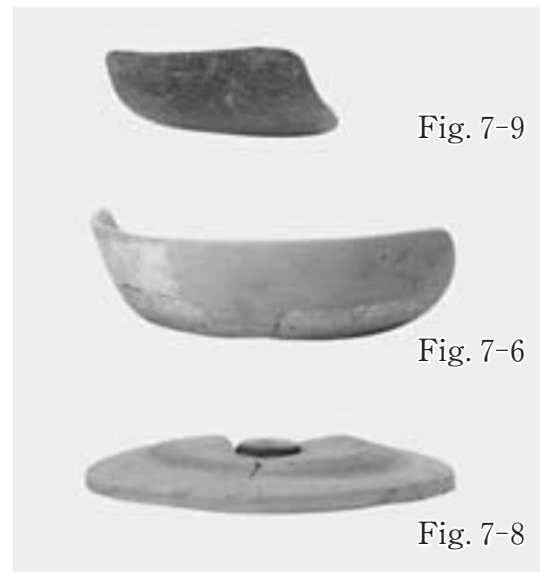
Fig. 7 SI-8 実測図 (S=1/60)



PL. 3 SI-8

出土遺物 (Fig. 8) 6は復元口径15.6cm、器高4.3cmを測る須恵器の坏身で、小田富士雄氏編年のIV期（以下小田編年）、また大宰府編年のIII期にあたる。胎土はわりに精製されるが、焼成は悪い。色調は内外面ともに灰白色（7.5Y7/1）を呈す。7は土師器坏a。内面の調整は磨耗が著しく不明。外面の調整はケズリ後ミガキが施される。胎土は少量の砂粒が含まれるが、焼成は悪い。8は1.85cmと器高の低い須恵器つまみ付蓋で口径15.1cmを測り、大宰府編年のIII期に該当する。口縁端部は真っ直ぐで体部につながる。焼成は良好で、胎土に砂粒が多く含まれ、内面は転用硯として使用されている。復元口径10.1cm、器高2.9cmの土師器丸底坏aの9は、外面をケズリ後ミガキ調整、内外面の口縁部はミガキ調整を施し、内面体部にはミガキ調整がウッスラと残る。焼成は良好。10は須恵器甕の口縁部片で、内外ともに灰色（N4/0）の色調を呈す。胎土には砂粒・白色粒を含み焼成は良好。内面肩部はタタキ後ナデ調整され、外面胴部上位には平行タタキが残る。6～10いずれも住居跡埋土上層からの出土で、床面直上のものではなく、住居跡の時期決定の根拠遺物とは考え難い。

SK-5 (Fig. 9) 調査区の東側で検出された。この土坑は八女ローム層まで掘り込まれて、平面プランは不整な隅丸正方形の形状を呈す。主軸をN-59°-Eにとる。南・北コーナー部分は角張らず丸みを持つ。東・西のコーナー部はPitや攪乱により切られるが、土坑本体は遺存状況は良い方である。特に残存状況の良い南壁は長さ2.2m、深さ95cmを測る。壁はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。東壁は長さ2.2m、深さ0.4mで、壁は他の壁体とは異なり斜めに立ち上がる。西壁は2.3mの長さで深さも0.67mとなる。壁は、ほぼ真っ直ぐに立ち上がり方をみせる。床面は平坦で8個のPitがあるが、ほとんどが深さ10～20cm程で表土と同様な埋土であった。このため殆どが上部遺構のものと考えられた。この土坑に伴うのは床面の中央部にある不整な円形形状を呈す径35cm、深さ65cmのPitだけである。遺物は埋土中より少量出土したが図示できるものは少なく2点だけである。少量の遺物も総てが弥生中期後葉のもので、その前後のものは出土していない。遺構は弥生時代の遺構と考えてよいと思われる。



PL. 4 SI-8 出土遺物

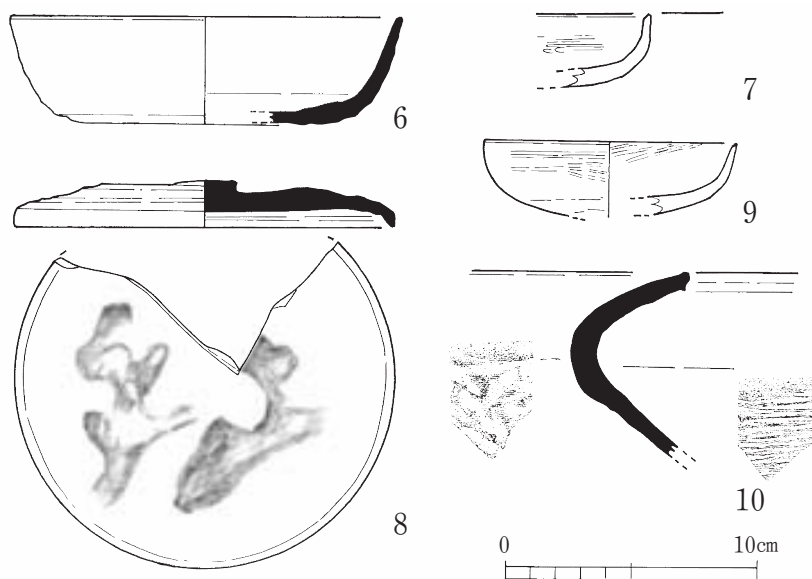


Fig. 8 SI-8 出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物 (Fig. 10) 11の色調は外面にぶい黄橙色 (10YR7/3)・淡黄色 (2.5YR8/3)、内面浅黄色 (10YR8/3) を呈す。器高4.3cm、底径8.7cmを測る。砂粒を多量に含み、少量のウンモ・カクセン石をも含むが、焼成は良い。内面は著しい磨耗のため調整不明、外面にはハケ目が施される。12は器高8.5cmを測る甕の底部で、外面は、にぶい黄橙色 (10YR6/3)・橙色 (5YR6/5)、内面にぶい黄橙色 (10YR7/4) をなし、胎土には多量の砂粒が含まれ、焼成は普通である。

SD (溝状遺構) (Fig. 5)

8条の溝を検出した。溝は殆どが東西方向に延びて住居跡の南壁に平行している。溝の形状は細長い土坑状を呈す。住居壁から2 m 前後の距離をおいて、壁より高い斜面の位置に掘られて、住居やその他の遺構の排水施設の役割をなしている。現状では、深さは18cm 前後と残存状況は良くない。隈・西小田地区遺跡群で調査された集落の中でも多く検出されている。ただ斜面に築かれた住居の総てに

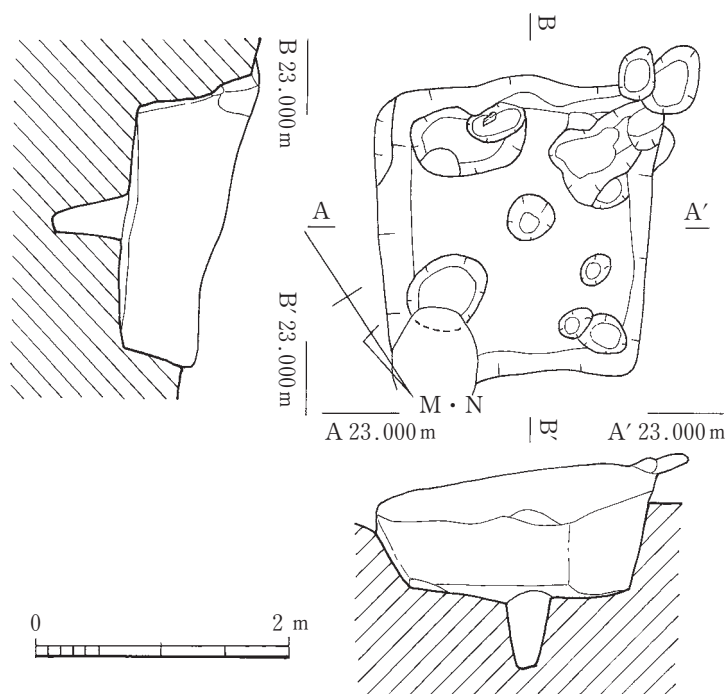


Fig. 9 SK-5 実測図 (S=1/60)



PL. 5 SK-5

付帯した溝とは考え難く、時期により分けられた可能性をもつ。出土した遺物は時期幅があり、少量である。

出土遺物 (Fig. 11) 14は復元口径11.1cm、器高5.9cmの土師器坏 a。内外の調整は回転ミガキを施す。大宰府編年のII・III期に該当する。16は凝灰岩製の磨製石斧で、長さ14cm、幅8cmで基部・刃部を欠損している。17は甕の蓋で、色調は内外ともにぶい黄橙色 (10YR7/4) を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。20は丹塗りの壺で瓢形をなす。胎土に砂粒・カクセン石・ウンモを含むが、焼成は良い。胴部中位に断面三角形の凸帯が巡る。

Pit 出土遺物 (Fig. 12) P-54出土の21は丸底坏 a。磨耗が著しく内外の調整は不明。色調は内外ともに橙色 (5YR6/6)・(7.5YR7/6) を呈す。22は土師器甕の口縁部で、微砂粒を含み、焼成は普通である。24は復元口径13cm、器高3cmの坏 a。磨耗のため内外の調整は不明で、色調は外面明赤褐色 (2.5YR5/8)、内面橙色 (2.5YR4/8) をなし、P-33より出土。22~24は大宰府編年II・III期に当たる。25は須恵器高台付坏で、内外ともに灰色 (N6/) の色調をなす。胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。高台は低く、底部の端近くに付く。内面口縁付近に墨痕が残り、P-35からの出土。26はP-23から出土の須恵器坏身で、復元口径12.1cm、器高4.1cmを測る。内外面灰白色 (N7/)・(5Y1/1) の色調を呈す。砂粒を含み、焼成は悪い。27は底部がへう切り後ナデにより調整がなされる。口径13cm、器高3.3cmの須恵器坏身である。色調は内外ともに灰色 (N6/)・(N5/) で、砂粒を少量含み焼成は良好で、底面に墨書がある。これもP

-23より出土した。25~27は大宰府編年III期に該当する。口縁部が逆L字を呈す、弥生中期後葉の甕である28は、砂粒・カクセン石・石英を多く含む。内外の胴部はハケによる調整がなされる。20は甕の底部。30は甕の底で穿孔は外側からされている。いずれも中期後葉のもので、P-51から出土した。31・35は弥生中期後葉に該当する器台である。33は弥生中期後葉の壺の底部で、内外ともに磨耗が著しく調整は不明である。36は弥生中期の筒形器台の小片である。

4. おわりに

今回の調査区は狭く、検出した遺構も1棟の竪穴住居跡・土坑1基と少ない。また出土した遺物も床面のものではなく時期決定の根拠に欠けて、この遺跡の全容は確認できなかった。位置と環境で述べたように調査地は隈・西小田地区遺跡群第10地点の集落の一部にすぎず、集落全体は第10地点とともに考えていく必要がある。ただ弥生時代の遺跡として注目されている隈・西小田地区遺跡群だが、遺物中には「里」と刻字された須恵器甕の破片や検出した遺構には蔵骨器^{註1}など古代に関連し



Fig. 10-11

Fig. 10-12

PL. 6 SK-5 出土遺物

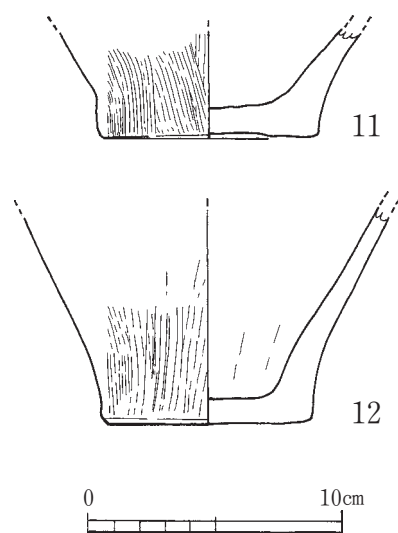


Fig. 10 SK-5 出土遺物
実測図 (S=1/3)

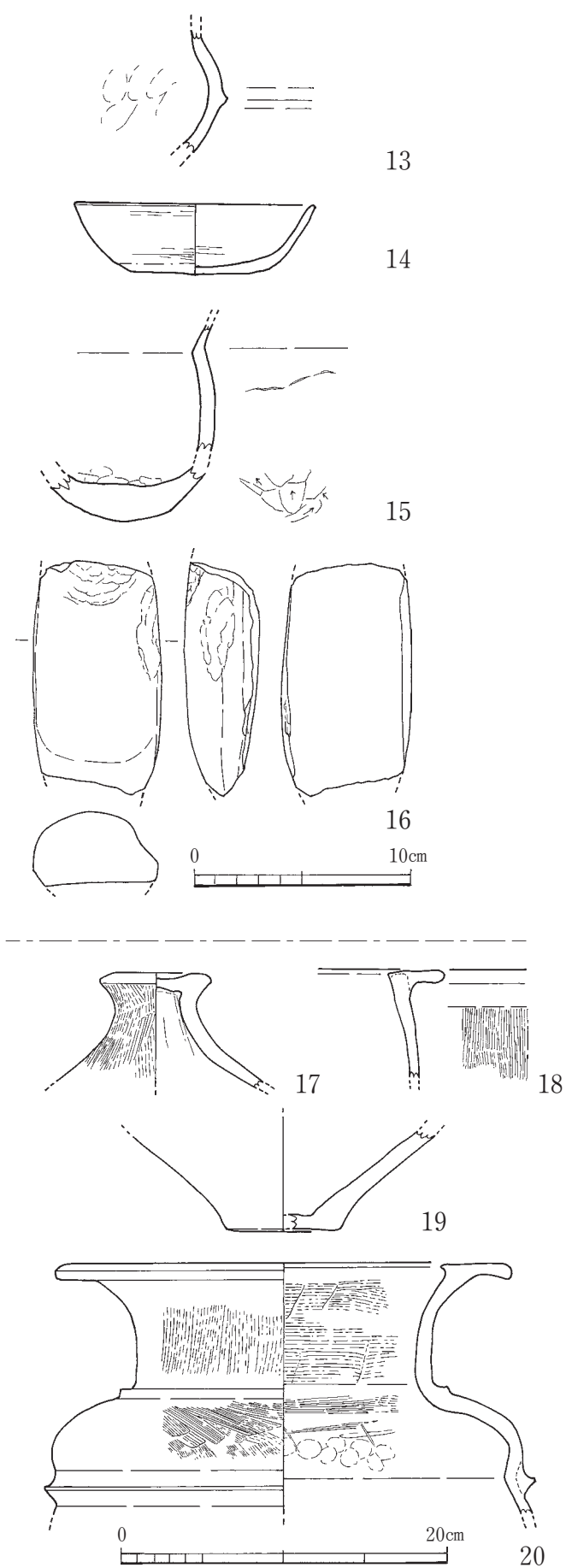
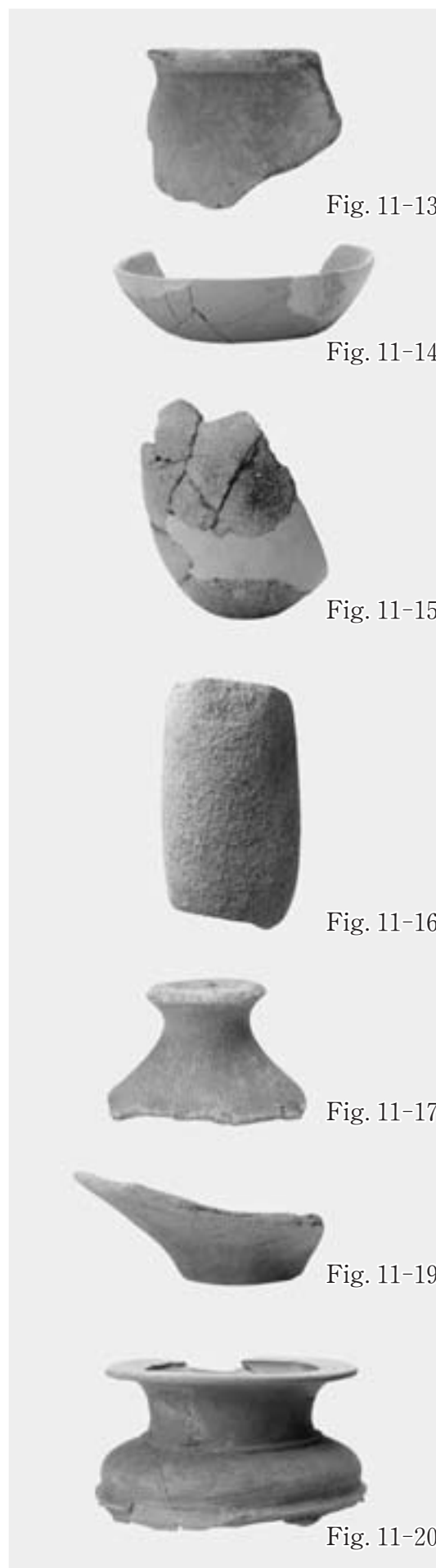


Fig. 11 SD 出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)



PL. 7 SD 出土遺物

たものも含まれている。今回の調査で出土した遺物の中に 8 世紀中頃の土師器や須恵器が含まれている事には留意する必要がある。それらの遺物の出土した Pit は、建物跡として纏まるものはなく、遺構自体から推測できるものはない。また出土遺物の須恵器蓋の転用硯は住居跡の埋土中とはいえ、あきらかに住居跡のものとは考え難い。試掘調査で確認できた遺構面上の土は、大正・昭和の時代の積み土ではない事は地権者から確認できている。この事から、①さほど遠くない場所から持ち込まれたもの、②丘陵頂部開墾時の流れ込みが想定される。いずれにしても 8 世紀中頃の周辺状況を知る上での一資料になり得ると考えておきたい。

註 1（編集者が調査担当者として現認）

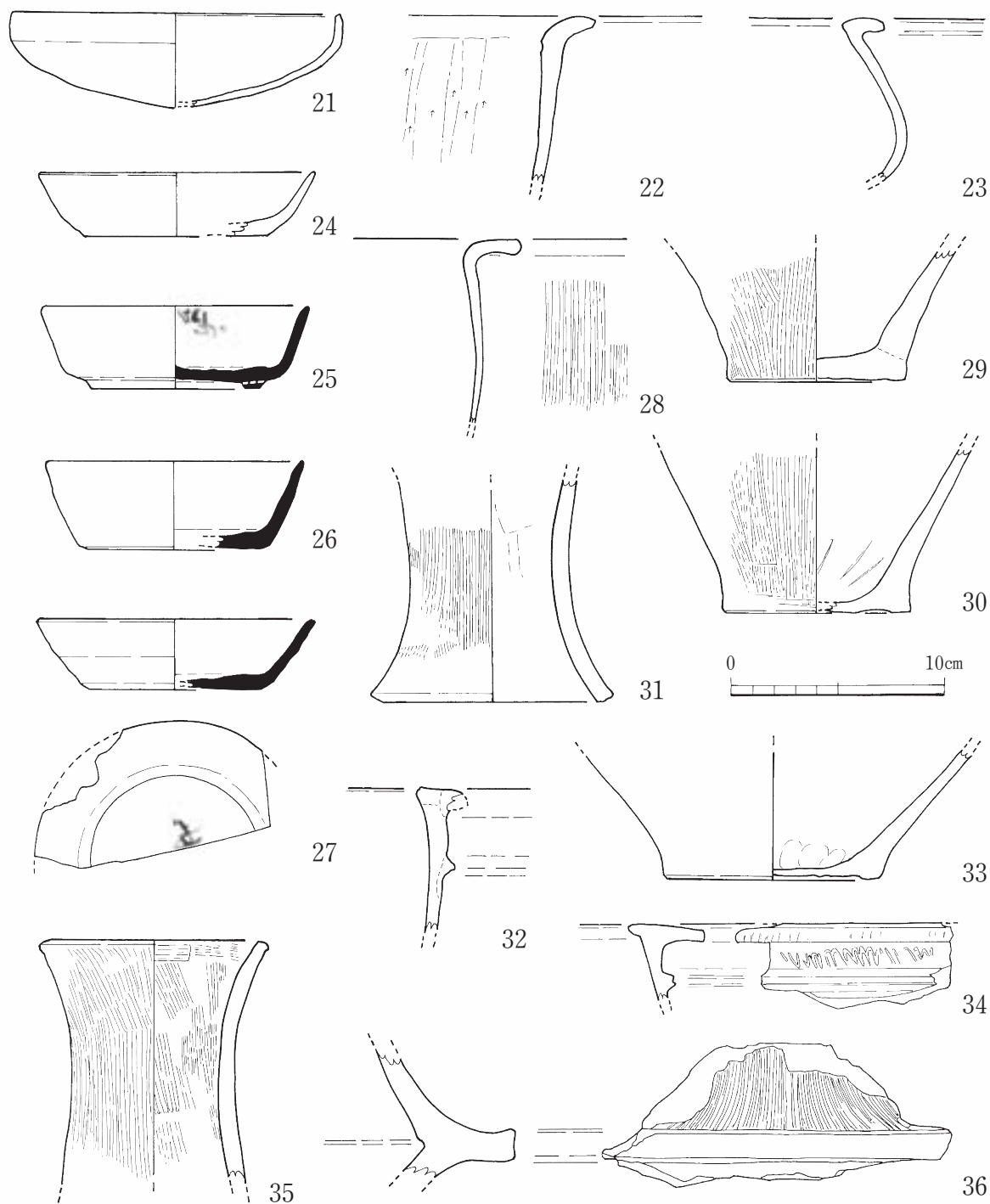


Fig. 12 Pit 出土遺物実測図 (S=1/3)



Fig. 12-21



Fig. 12-22



Fig. 12-23



Fig. 12-24



Fig. 12-25



Fig. 12-28



Fig. 12-29



Fig. 12-26



Fig. 12-31



Fig. 12-30



Fig. 12-27



Fig. 12-33



Fig. 12-27



Fig. 12-35

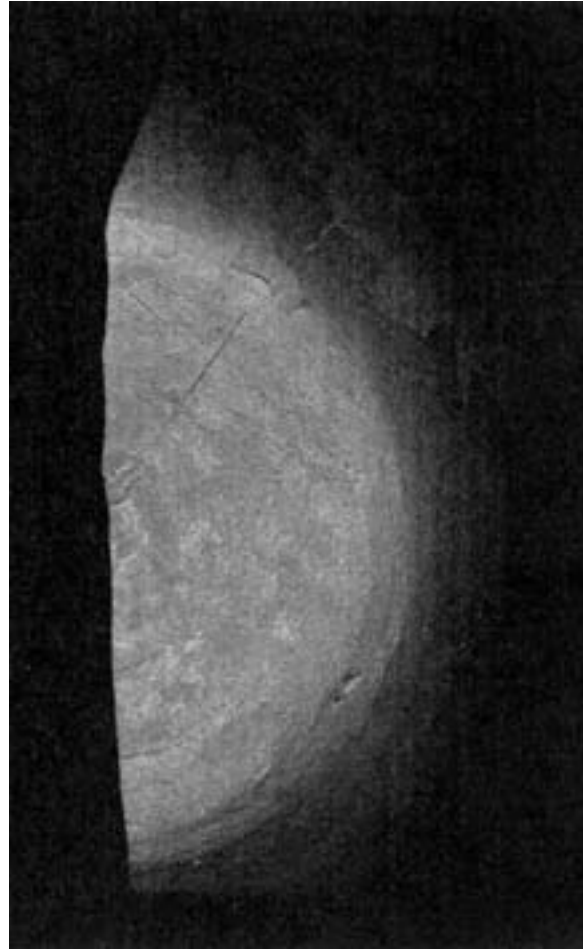


Fig. 12-27

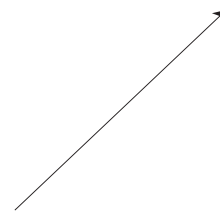
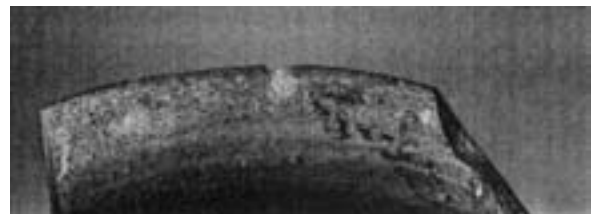
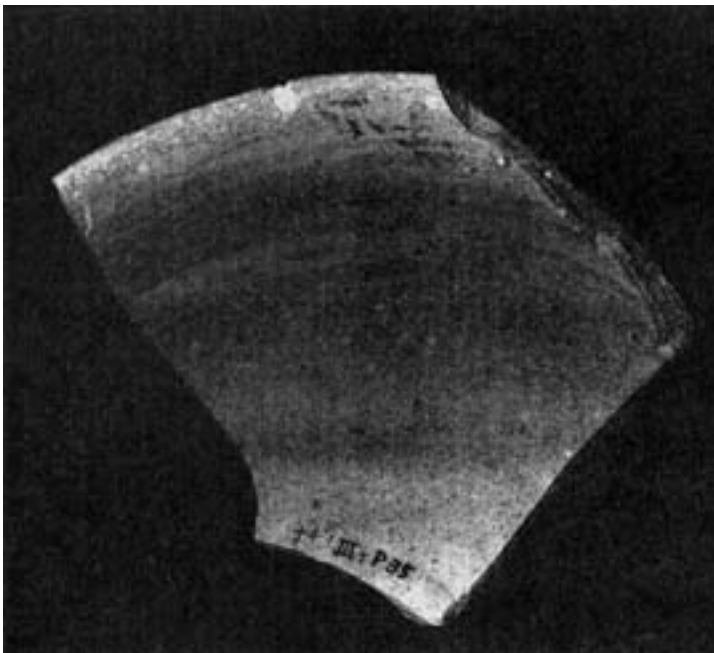


Fig. 12-25

表-1 出土遺物観察表

法量の()は推定値・復元値を示す

Fig.番号	器 種	法 量 (cm)			手 法 の 特 長	備 考				
		口 径	底 径	器 高		A.色調	B.胎土	C.焼成	D.残存状況	E.その他
Fig. 6-1	高坏 (弥生土器)			1.80	内外面ともにナデ	A.外面橙色 (5YR6/6)、明赤褐色 (5YR5/6)、内面に黄褐色 (10YR6/4) B.0.5～2 mm程度の砂粒・ウンモを含む。 C.普通				
Fig. 6-2	甕 (須恵器)			3.60	内外面ともにヨコナデ	A.外面灰色 (7.5Y5/1)・(7.5Y6/1)、内面灰色 (5Y6/1) ～灰オリーブ色 (5Y6/2) B.白色粒を僅かに含む。 C.普通 D.口縁部1/5				
Fig. 6-3	甕 (須恵器)			8.00	内面口縁部から頸部ヨコナデ後ナデ 外面胴部タタキ 内面頸部から胴部に青海波のタタキ	A.外面灰色 (10Y6/1) (10Y5/1)、内面灰色 (5Y6/1) B.0.5～1 mmの砂粒を少量含む。 C.やや不良				
Fig. 6-4	高台付坏 (須恵器)	(12.6)	高台径 (7.9)	3.60	内底面から外面体部までヨコナデ 外底面ヘラ切り後ナデ	A.外面灰白色 (N7/) (5Y7/2)、内面灰白色 (N7/) B.微砂粒～1.5mmの砂粒を少量含む。 C.良好 D.全体の1/2 E.ロクロ回転 右				
Fig. 6-5	壺 (弥生土器)	(28.8)		25.90	内面頸部から胴部中位ナデ、胴部中位から下位にハケ目、頸部に指頭痕 外面口縁部から頸部上位ヨコナデ、胴部上位から下位にハケ目	A.外面橙色 (5YR6/6) (7.5YR6/6)、内面橙色 (7.5YR6/6) B.0.5～1 mm程度の砂粒、白色粒を多量に含む。ウンモ・赤褐色粒を含む。 C.普通 D.口縁から胴部の1/3強				
Fig. 8-6	坏身 (須恵器)	(15.6)	(12.0)	4.30	内底面ナデ 内外面の体部ともにヨコナデ 外底面ヘラ切り後ナデ	A.外面灰白色 (N8/) (N7/)、内面灰白色 (7.5Y7/1) B.微砂粒を少量含む。 C.やや不良 D.全体の1/3 E.ロクロ回転 右				
Fig. 8-7	坏 (土師器)			2.90	内面摩耗のため調整不明 外面ケズリ後ミガキ	A.外面に黄褐色 (10YR6/4)・に黄褐色 (7.5YR6/4)、内面に黄褐色 (10YR6/3)・黄褐色 (10YR5/3) B.微砂粒を少量含む。 C.普通				
Fig. 8-8	蓋 (須恵器)	15.1		1.85	内面天井部から外面体部ヨコナデ 外面天井部ヘラケズリ 外面つまみ部ナデ	A.外面灰色 (N6/)・灰白色 (2.5Y7/1)・褐灰色 (10YR6/1)、内面灰白色 (2.5Y7/1)・灰色 (N6/) (N5/) B.微砂粒～2 mm大の砂粒を含む。 C.良好 D.全体の3/4 E.ロクロ回転 右、内面転用硯				
Fig. 8-9	坏身 (土師器)	(10.1)		2.90	内底面摩耗のため調整不明 内外面の口縁部ミガキ 外面体部から底面ケズリ後ミガキ	A.外面に黄褐色 (10YR7/4)・明黄褐色 (10YR7/6)、内面に黄褐色 (10YR7/4) (10YR6/4) B.微砂粒～0.5mmの砂粒を含む。 C.良好 D.全体の1/4 E.内外面の口縁部付近にスス付着				
Fig. 8-10	甕 (須恵器)			7.50	口縁部内外面ともにヨコナデ 内面肩部タタキ後ナデ 外面胴部上位に平行タタキ	A.内外面ともに灰色 (N4/0) B.0.3～1 mm程度の砂粒・白色粒を含む。 C.良好				
Fig. 10-11	甕 (弥生土器)		8.7	4.30	内面摩耗のため調整不明 外底面ナデ 外面ハケ目	A.外面に黄褐色 (10YR7/3)・淡黄色 (2.5Y8/3)、内面浅黄褐色 (10YR8/3) (10YR8/4) B.微砂粒～2 mmの砂粒を多量に含む。ウンモ・カクセン石を含む。 C.良好 D.底部のみ				
Fig. 10-12	甕 (弥生土器)		8.3	8.50	内底面ナデ 内面胴部下位ナデ、工具痕あり 外面胴部ハケ目後ナデ 外底面ナデ	A.外面に黄褐色 (10YR6/3) (10YR7/4)・橙色 (5YR6/6)、内面に黄褐色 (10YR7/4) (10YR6/4) B.0.2～1.5mmの砂粒を多量に含む。 C.普通 D.底部				
Fig. 11-13	ミニチュア壺 (弥生土器)			5.85	内面胴部ナデ 指頭痕を残す 外面摩耗のため調整不明	A.外面に黄褐色 (10YR6/4)、内面橙色 (7.5YR6/6) B.0.5～1 mm程度の砂粒を含む。ウンモを少量含む。 C.普通				
Fig. 11-14	坏身 (土師器)	(11.1)	5.9	3.30	内面から外面体部回転ミガキ 外底面ヘラケズリ後回転ミガキ	A.外面橙色 (2.5YR6/8)、内面橙色 (2.5YR6/8) B.微砂粒～1 mmの砂粒・ウンモを含む。 C.良好 D.全体の3/5 E.ロクロ回転 左				
Fig. 11-15	ミニチュア壺 (弥生土器)			6.10	内底面ナデ指頭痕あり 内面胴部ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 外面胴部ナデ 外底面ナデ、部分的ケズリ	A.外面に黄褐色 (7.5YR6/4)・に黄褐色 (10YR6/4)、内面に黄褐色 (7.5YR6/4)・橙色 (7.5YR6/6) B.0.2～1.5mmの砂粒を含む。 C.普通 D.口縁部から底部まで2/5				
Fig. 11-17	蓋形土器 (弥生土器)	天井部 6.85		7.15	内面ナデ工具痕あり 外面ハケ目	A.内外面ともに黄褐色 (10YR7/4) (10YR6/4) B.0.2～1.2mmの砂粒を含む。赤褐色粒・ウンモを含む。 C.良好				
Fig. 11-18	甕 (弥生土器)			6.75	口縁部から内面ナデ 外面胴部上位ハケ目・スス付着	A.外面に黄褐色 (10YR7/4)・に黄褐色 (7.5YR5/3)、内面に黄褐色 (10YR7/4) B.微砂粒～1 mm大の砂粒を含む。 C.良好 D.口縁の1/8				
Fig. 11-19	壺 (弥生土器)		(7.0)	6.30	内外面ともに摩耗のため調整不明	A.外面に黄褐色 (10YR7/4) (10YR6/4)、内面明黄褐色 (10YR7/6)・に黄褐色 (10YR6/4) B.0.2～1.2mmの砂粒を含む。カクセン石・赤褐色粒・ウンモを少量含む。 C.普通 D.底部1/3 E.赤彩				
Fig. 11-20	壺 (弥生土器)	(28.1)		15.60	内面頸部から口縁部ハケ目 頸部から胴部ナデ 口縁部内外面ともにヨコナデ 外底面ハケ目胴部ヨコナデ	A.外面赤色 (10YR5/8)、内面橙色 (7.5YR7/6) B.0.5～2.0mm程度の砂粒・黒色粒を含む。ウンモ・カクセン石を少量含む。 C.良好 D.口縁部から胴部上位 E.外面に赤彩、内面は部分的に赤彩				
Fig. 12-21	盤 (土師器)	(15.3)		4.40	内外面ともに摩耗のため調整不明	A.外面橙色 (5YR6/6) (7.5YR7/6)、内面橙色 (7.5YR7/6) (7.5YR6/6) B.微砂粒をわずかに含む。赤褐色粒を少量含む。 C.普通 D.全体の1/4				

Fig.番号	器 種	法 量 (cm)			手 法 の 特 長	備 考				
		口 径	底 径	器 高		A.色調	B.胎土	C.焼成	D.残存状況	E.その他
Fig.12-22	甕 (土師器)			7.95	内面胴部ケズリ 口縁部の内外ともにヨコナデ 外面胴部ナデ	A.内外面ともに橙色 (2.5YR6/6) B.微砂粒～1mmの砂粒を含む。 C.普通 D.口縁部の1/5				
Fig.12-23	無頸壺 (弥生土器)			7.70	内外面ともに摩耗のため調整不明	A.外面浅黄褐色 (10YR8/3)、内面浅黄褐色 (10YR8/3)・にぶい黄褐色 (10YR6/4) B.微砂粒～4mmの砂粒を少量含む。ウンモ・赤褐色粒を含む。 C.普通 D.口縁部1/5から体部上半1/8				
Fig.12-24	坏身 (土師器)	(13.0)	(8.5)	3.00	内外面ともに摩耗のため調整不明	A.外面明赤褐色 (2.5YR5/8)、内面橙色 (2.5YR4/8) B.微砂粒～1mmの砂粒を含む。カクセン石・赤褐色粒を少量含む。 C.普通 D.口縁から底部1/6				
Fig.12-25	高台付坏 (須恵器)	(12.5)	(9.8)	3.85	内底面ヨコナデ後ナデ 内面体部から外面高台までヨコナデ 外底面ヘラ切り後ナデ	A.外面灰色 (N6/) (N5/)、内面灰白色 (N7/)・灰色 (N6/) B.微砂粒～1.2mmの砂粒を含む。 C.良好 D.全体の1/4 E.内面に黒痕あり				
Fig.12-26	坏身 (須恵器)	(12.1)	(8.8)	4.10	内底面ナデ 内面体部から外面体部までヨコナデ 外底面摩耗のため調整不明	A.外面灰白色 (N7/) (5Y7/1)、内面灰白色 (7.5Y7/1) (N7/) B.微砂粒～0.5mmの砂粒を含む。 C.不良 D.口縁から体部1/6、底部1/4				
Fig.12-27	坏身 (須恵器)	(13.0)	(7.8)	3.30	内外面ともにヨコナデ 外底面ヘラ切り後ナデ	A.外面灰色 (N6/) (N5/)、内面灰色 (N6/) B.微砂粒～2mm大の砂粒を少量含む。 C.良好 D.全体の1/3 E.口縁回転 左、外底面に墨書あり				
Fig12-28	甕 (弥生土器)			8.60	内面胴部ナデ 口縁部の内外ともにヨコナデ 外面胴部ハケ目	A.外面にぶい黄褐色 (10YR7/3)・灰黄褐色 (10YR6/2)、内面にぶい黄褐色 (10YR7/4) B.0.2～1mmの砂粒を多量に含む。カクセン石・長石・石英・ウンモ・茶褐色粒を含む。 C.普通 D.口縁部				
Fig.12-29	甕 (弥生土器)		(8.2)	6.10	内面ナデ 内底面にこげ 外底面ナデ 外面ハケ目	A.外面にぶい黄褐色 (10YR7/4) (10YR6/3)、内面にぶい黄褐色 (10YR7/4) B.微砂粒～2mm大の砂粒を含む。 C.良好 D.底部1/4				
Fig.12-30	甕 (弥生土器)			8.8	内底面ナデ工具痕あり 内面胴部ナデ 外面胴部ハケ目 外底面ナデ	A.外面明黄褐色 (10YR7/6)・にぶい黄褐色 (10YR7/4)、内面明黄褐色 (10YR6/6)・にぶい黄褐色 (10YR6/4) B.0.2～1.2mmの砂粒を多量に含む。カクセン石・石英・長石・茶褐色粒を含む。 C.普通 D.底部のみ E.穿孔は外側より				
Fig.12-31	器台 (弥生土器)		11.3	10.40	内面ナデ部分的に工具痕あり 内外面の裾部ヨコナデ 外面脚部ハケ目	A.外面にぶい黄褐色 (10YR7/4)・橙色 (7.5YR7/6)、内面にぶい黄褐色 (10YR6/3) (10YR6/4) B.0.2～1.2mmの砂粒を多量に含む。 C.普通				
Fig.12-32	甕 (弥生土器)			6.80	口縁部の内外ともにヨコナデ 内面胴部ナデ 外面胴部ナデ、一条の突帯	A.外面にぶい黄褐色 (10YR6/4) (10YR7/4)、内面にぶい黄褐色 (10YR6/4) B.0.5～1mm程度の砂粒・ウンモを含む。 C.良好 E.突帯付近に黒斑				
Fig.12-33	壺 (弥生土器)		10.25	6.25	内外面ともに摩耗のため調整不明	A.内外面ともににぶい黄褐色 (10YR7/4) (10YR6/4) B.0.5～2.5mm程度の砂粒を含む。 C.普通 D.底部 E.外面に黒斑				
Fig.12-34	甕 (弥生土器)			4.00	内面摩耗のため調整不明 口唇部にキザミ	A.外面明赤褐色 (2.5YR5/6) (2.5YR5/8)、内面橙色 (7.5YR7/6) B.ウンモ・白色粒を多量に含む。赤褐色粒を少量含む。 C.普通 E.赤彩				
Fig.12-35	器台 (弥生土器)	受 部 (10.8)		16.50	内面ハケ目後ナデ 外面ハケ目	A.内外面ともににぶい黄褐色 (10YR7/4) B.微砂粒～2mm大の砂粒を含む。 C.良好 D.口縁～中部2/3				
Fig.12-36	大型器台 (弥生土器)			6.60	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ後暗文	A.外面明赤褐色 (2.5YR5/6)・にぶい黄褐色 (10YR7/4) (10YR6/4)、内面にぶい黄褐色 (10YR7/4) (10YR6/4) B.赤褐色粒と1mm程度の砂粒を少量含む。ウンモを含む。 C.良好 E.赤彩				
	高坏 (土師器)		11.30		内外面ともに摩耗のため調整不明	A.外面橙色 (7.5YR7/6)、内面にぶい橙色 (7.5YR7/4) B.赤色粒を含む。 C.良好 D.受部の一部と脚部のみ E.P39出土				
	甕 (弥生土器)		(8.0)	7.30	内面摩耗のため調整不明 外面ハケ目	A.外面にぶい黄褐色 (10YR7/4)、内面にぶい黄褐色 (10YR6/4) B.微砂粒・石英粒を少量含む。 C.良好 D.底部1/6				
	甕 (土師器)			7.80	内外面ともに摩耗のため調整不明	A.外面橙色 (5YR6/6) 内面橙色 (5YR7/6) B.精良 C.良好 D.底部から胴部1/8弱 E.P36出土				
	器台 (弥生土器)	裾 部 (5.6)	11.30		内面ナデ指頭痕が残る 外面体部ハケ目 裾部ナデ	A.外面にぶい黄褐色 (10YR7/4)、内面にぶい黄褐色 (10YR7/3) B.微砂粒・黒色粒を多量に含む。 C.良好 D.体部から裾部1/5				
	坏身 (土師器)			2.30	内外面ともに摩耗のため調整不明	A.外面橙色 (5YR6/6)、内面橙色 (5YR6/8) B.微砂粒を僅かに含む。 C.良好 D.口縁の1/10				
	甕 (弥生土器)			5.80	内外面ともに摩耗のため調整不明	A.内外面ともににぶい黄褐色 (10YR7/4) B.1～3mm大の砂粒を多量に含む。 C.普通 D.口縁部1/16 E.P75出土				

報告書抄録

ふりがな	なぎのいせき							
書名	椰野遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 88 集							
編集者名	渡 邊 和 子							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818-8686 筑紫野市二日市西1-1-1 TEL 092 (923) 1111(代)							
発行年月日	西暦2006年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なぎの 椰 野 遺 跡	福岡県 筑紫野市 大字隈	176	153	33° 37′ 51″	131° 28′ 45″	1998. 3 .25) 1998. 3 .31	40m ²	住宅建設 に伴う造成
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主な遺物	特記事項	
椰 野 遺 跡	集 落	弥生時代 奈良時代		竪穴住居跡 溝状遺構 土坑・柱穴		弥生土器 須恵器		

なぎの 椰 野 遺 跡

筑紫野市文化財調査報告書

第88集

平成18年 3 月31日

発 行 筑紫野市教育委員会

〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1

TEL 092-923-1111(代)

FAX 092-923-9644

印 刷 大同印刷株式会社

〒849-0902 佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

TEL 0952-71-8520(代)

FAX 0952-71-8528

URL <http://www.daidou-jp.com>

